

# 世界の名手たちが集結した「2005国際クラリネット・フェストTAMA東京」クラシックからジャズまで、改めて注目を集めた「セルマー・クラリネット」

世界中のクラリネット奏者や愛好者らが一堂に会した国際的なイベント、「2005国際クラリネットフェストTAMA東京」が7月18日から24日までの1週間、東京のバルテノン多摩で開催された。期間中は世界の名手たちが華麗な技を披露し音楽ファンを魅了したが、その中でも特に熱い注目を集めていたのがカルボナーレ、モラレスといった世界のトップ・プレイヤーたちと、彼らが愛用するセルマー・クラリネットだった。

**セルマーをこよなく愛する  
世界の名演奏家たちが贈る  
自身のステージ**

日本では初の開催となったこのフェストには、世界のクラリネット界を牽引する名手たちが多数参加するとあって、会場には連日多くのファンが詰めかけた。その中でも特に注目を集めていたのは、昨年、クラリネットを発表して100周年を迎え、その揺るぎない技術と伝統に裏打ちされたセルマー・クラリネットを愛用する世界のプレイヤーたちだった。

最初にご紹介するのは、日本でも絶大な人気を誇るアレクサンドロ・カルボナーレ。ローマ聖チェチリア音楽院教授と同管弦楽団の首席奏者を務めるかたわら、セルマー・クラリネットの開発にも携わっていることで知られている。

20日、大ホールで開かれたリサイタルでは開演前から長蛇の列ができており、北爪道夫の「連歌」やロッシーニの「歌劇モーゼによるディヴェルティメント」、プーランクの「ソナタ」など4曲を開かされた。



▲アレクサンドロ・カルボナーレ、三界秀実の両氏による絶妙のデュオ

セルマーの持ち味でもある、ふくよかでありながら輪郭の明瞭な音でしつとりと聞かせ、それは自分の思いそのままに反応する楽器とのやりとりを楽しんでいるかのようにも感じられた。

21日に大ホールで開かれた「セルマー・ガラコンサート」は国際色豊かで、前述のカルボナーレのほか、フランスからは巨匠ミシェル・ポルタル、バス・クラリネットの鬼才ルイ・スクラヴィスは、アメリカからは新星リカルド・モラレス（フィラデルフィア管首席）とジェシカ・フィリップス（メトロポリタン歌劇場管）が、日本からは八段悠子、三界秀実の2人の計7人が出演し、まさに世界の名手たちがそろい踏みして最高のステージが展開された。

トップに登場したモラレスは、メトロポリタン時代の仲間ジェシカとメンデルスゾーン「演奏会用小品第2番」を超美技を駆使して聞かせ、続いて得意のメサージュ「ソロ・ド・コンクール」でも圧倒的なテクニクとあくまでまるやかな音を堪能させ、会場からは拍手の渦が巻き起こった。

続いて、前夜の興奮冷めやらぬ観客の前にカルボナーレと、同世代の三界秀実



▲セルマー・パリ社の特設ブースでもミニ・コンサートを開いたモラレス氏

が登場。ボンキエツリの「歌劇イル・コンヴェーニョより」を2本のクラリネットが歌い出すと、見事に息の合った応答と、セルマーだけが紡ぎ出すことのできる華麗なハーモニーに陶醉させられるばかり！

巨匠ポルタルは、パリ音楽院を首席で

卒業後、ジュネーヴ国際コンクールで優勝するなど、クラシック奏者として輝かしい実績を積んできたが、その後、現代曲やジャズにも傾倒していき、1970年頃からはバス・クラリネットでジャズを本格的に始め、レコーディングや作曲に先駆的な役割を果たした異色のクラリネット奏者でもある。

**セルマー・バスクラの最強デュオ  
ポルタル&スクラヴィス**

これが初来日になるスクラヴィスは、9歳でクラリネットを手にし、20歳でバス・クラリネットを本格的に吹き始めた異色のスーパー・クラリネットティストだ。また、セルマー・パリ社の新製品プ



▲「プリビレッジは僕とここにいるポルタル氏とで開発した世界最高のバス・クラリネット！」と語るスクラヴィス氏（左）

リビレッジは、ポルタルと共に開発に際してのアドバイザーを行ったという。まずはバス・クラリネット・ソロの「コントル・コントル」。高音域ではアルト・サクスを思わせる美音が、また低音域ではセルマー本来の濃厚で芳醇な音が流れ出した。そして、それは速いフレーズでも濁ることなくしつかりと聞き取れた。

そして、この日最後のステージとなったスクラヴィス&ポルタルの世界最強バス・クラ・デュオの演奏では、スラップ・タンギングや重音奏法を織り交ぜたテクニクの見事さと、これまでほとんど意識されることがなかった独奏楽器としてのバス・クラの多彩な魅力に、観客の目と耳は釘づけとなった。

2人に、ヨーロッパのバスクラ事情をたずねてみた。

「ヨーロッパでは演奏家が常に新しい音を探し求めているが、ここ最近多くのクラリネット奏者が新たな可能性として注目しているのがバス・クラリネットの音なんだ。見た目は不器用な楽器に見えるけど、バス・クラリネットはサクセスやチェロ、あるいは人の声をイメージさせる可能性があることが分かったんだ。ジャズを演奏するようになってきたのは、現代音楽とジャズは重なる部分が多いから、自然にそうなっただけ」

さて、ヨーロッパでは30年以上の歴史があるジャズ・バス・クラリネット。いったいどんな演奏が繰り広げられるのかと、観客の期待は高まるばかり。

1曲目は「ミシェル・ジャングル」。お互いに対等な立場で会話を交わす構成で、先ほどスクラヴィスのところで紹介したバス・クラのソリスティックな性能をあますところなく聞かせてくれた。2曲目は「エスパス3」。スクラヴィスが伴奏にまわり、自由自在に動き回るポルタルのメロディをサポートするという、これまで見たこともないバス・クラリネ

ットだけが生み出し得る音楽に大満足！バス・クラリネットはソロ楽器としての可能性を多岐に秘めている楽器なんだ、ということを強烈に再認識させられた。

また、スクラヴィスは自ら開発に携わった「プリビレッジ」について力強くこう語っていた。

「このニュー・モデルは、さらに音程がよくなっているからみんな満足しているし、なによりすごい圧力で吹くときにもまだまだ余裕を持って鳴ってくれる！僕のイメージをすべて音にしてくれるんだ」

おしまいに、この日登場した唯一の日本人若手奏者をご紹介しよう。

八段悠子は、2004年の第6回日本クラリネットコンクールで第2位、ならびに第21回日本管楽器コンクール第1位に輝いた経歴を持つ、現在若手で最も注目される奏者の一人だ。

これからの日本のクラリネット界を背負っていくプレイヤーとして、内外のプレイヤーが注目する中、フランセの「主題と変奏」を披露した。そのきゃしゃな外見からは想像し難いようなポリューム感あふれる音で、クラリネットの可能性を十分に押し切った堂々の演奏であった。そして、セルマー・クラリネットの未来への広がりを確信した満員の客席から大きな拍手がおくられていた。



▲世界のセルマー奏者が勢揃い（前列左からスクラヴィス、モラレス、カルボナーレ、フィリップス、ポルタルの各氏）



▲甘くふくよかな音で魅了した八段悠子さん

**セルマー・パリ社  
バス・クラリネット  
「プリビレッジ」**

調子：Bb  
システム  
Low E♭モデル：19キー  
連結式のG#、自動オクターブ・キー  
Low Cモデル：22キー。連結式のG#、E♭レバー+親指E♭キー、自動オクターブ・キー  
キー：洋銀、真鍮製に銀メッキ  
上管、下管：グラナディラ  
ペル：真鍮製に銀メッキ  
金属製リゾネーター付きレザー・パッド  
ニードル・スプリングはステンレス・スチール製  
マウスピース、リガチャー、キャップ付き  
オリジナル・コンパクト・ケース付き

**HENRI SELMER PARIS**